

Title	ジッキンゲン論争と歴史劇
Author(s)	八木, 浩
Citation	大阪外国語大学学報. 24 p.41-p.56
Issue Date	1971-03-30
oaire:version	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/80398
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ジッキンゲン論争と歴史劇

八 木 浩

Sickingen-Debatte und das historische Drama

Hiroshi Yagi

Die Frage, warum Lassalles historisches Drama „Franz von Sickingen“ in der Geschichte der deutschen Literatur nicht zähle, während die Briefe von Marx und Engels über dieses Werk ästhetisch-theoretisch so wichtig geworden sind, möge hier beantwortet werden, weil deren Antwort uns wichtige Probleme der marxistischen Literaturforschung lösen wird.

Lassalle, der sich zur Revolution bekennt, hebt die bürgerliche Idee eines einheitlichen Reiches der Deutschen hervor, „wie es im folgenden Jahrzehnt von Preußen bei Unterdrückung aller demokratischen Kräfte geschaffen wurde“ (Peter Weber). In den Kernproblemen der tragischen Idee, der Klassenverhältnisse, des plebejischen Elements, der Historizität und Aktualität war er nicht richtig und als Folge dessen konnte er den großen Gegensatz von seiner revolutionären Intention und ästhetischen Theorie nicht auflösen.

Daß Marx und Engels diese Kernprobleme geworfen haben, indem sie uns die Richtungen, womit man sie lösen kann, gegeben haben, zeugt zugleich, daß die beiden die wichtigsten Probleme der Kunst lösen können, was wirklich geschah. Denn die Probleme der Politik waren bei Marx und Engels wirklich dieselben der Kunst wie folgt: 1) Der Scheincharakter der Kunst, die die politische Wirklichkeit nicht widerspiegelt, sondern vielmehr idealisiert, wird als unwahr kritisiert. 2) Das mißverstandene Geschichtsdrama in der Geschichte wird die falsche und entstellte Geschichtlichkeit im Geschichtsdrama herstellen. 3) Lassalles Stellung in der Geschichte der deutschen Ästhetik ist derselben des Vischers oder Hebbels ähnlich und das war die Folge des Scheiterns der 48er Revolution.

Die Meinung der mehreren Wissenschaftler, die diese Debatte nicht wichtig nehmen, kommt daher, daß sie die erste schöpferische Auffassung vom Geschichtsdrama, die von Lessing und Goethe vertreten war und jetzt durch Marx und Engels wissenschaftlich bestätigt wurde, nicht verstehen konnten. Lassalle liegt im Bannkreis seiner Zeit und konnte ihn nicht brechen.

Die Interpretationskunst, die heutzutage im Gegensatz zu den anderen Methoden wichtig genommen wird, hat keinem Widerspruch mit dem Marxismus, insofern sie den Maßstab der Gedankentiefe und des bewußten historischen Inhalts nicht wegläßt. Auch die empirische soziologische Methode, welche die Schwäche hat, daß sie je nach der Erfahrung denkt und korrigiert, daß der Maßstab Menschlichkeit ist, die mit der Praxis und Tat ungebunden ist,

ist nicht mit der marxistischen Methode unvereinbar. Aber was Marxismus als Methode der Literaturforschung nicht verzichten kann, ist der historische Materialismus, womit der Künstler die Wirklichkeit klar sieht und sie gestaltet.

I ラサルの「フランツ・フォン・ジッキンゲン」について

フェルディナント・ラサル（1825—1864）は1848年革命のころマルクスを識り、「新ライン新聞」に協力し、プロシヤ政府に対する武装蜂起を呼びかけて逮捕され、49年春半年の禁錮刑を受けた。彼はそのごハッツフェルト伯夫人の離婚・財産訴訟で有名になったが、1862年までエンゲルスによると、「強いボナパルティズム傾向のプロシヤの俗流民主主義者だった」が、この年にライプチヒの労働者委員会が労働運動に参加するように呼びかけるや、「突然個人的な原因からこの運動に転向し、アジテーションを始めた。」彼は労働者にブルジョアジーに対する斗争に立ちあがるように呼びかけ、1863年5月23日「一般ドイツ労働者協会」（ADAV）を設立した。彼はマルクスの研究成果をも利用したが、それをしばしば俗流化して、平等直接選挙権が革命の手段だとか、国家援助による生産連盟の設立が社会主義への平和な道だといい、そのためにビスマルクと談じて巧みに交渉しようとした。1864年決斗でたおれるまでのラサルについて、とくにその他種々の著述活動があげられるが、そのうち珍しい作品としてはドラマが一つあり、これが問題の悲劇「フランツ・フォン・ジッキンゲン」である*1。この作品は「一般ドイツ労働者協会」設立前の1856年から58年に書かれ、58年には短縮して、さらに59年には完全な形で出版された。59年3月6日のマルクスあての手紙では、革命の挫折感のもとにラサルはヘラクレートスを研究してその哲学についての書物を書き、また同時にドイツ中世、啓蒙主義、とくにフッテンの作品を研究し、同時代人のドラマを読んだりしたが、それらに満足できず、自分でドラマを書くに足る素材を求め始め、フッテンからジッキンゲンへとその重心を次第に移して考えつづけた。„Das mußt du auch ausführen und so sehr ich mich auch scheute, so riß es mich hin. Jetzt konnte ich mich in Wut und Haß berauschen, konnte ihren Wogen Luft machen, konnte so vieles vom Herzen schreiben. . . “ とかいて、血が湧き、心が踊る思いであったさまを、ラサルは伝えている。これは決して虚栄心からできたのではなく、反対に内面から湧出したたいへんよい仕事である、しかしこれがたとえ世の最上のドラマであっても、再びドラマは書くまい、と彼はしるしている。これは天から授けられた作品のようだったという彼の言葉に、たいへん大きな自信がひめられていることはいうまでもない*2。

3月6日に彼はマルクスにこの作品とともに、上にのべた最初の手紙を送り、さらに「悲劇的理念についての手稿」をもそれにそえた*3。これに対してマルクスは4月19日に*4、エンゲルスは5月18日に回答を寄せた*5。これらの手紙はマルクス、エンゲルスの文学論の中心的問題を含んでいて、世に有名なジッキンゲン論争の最も重要な資料となった。さらにラサルは2人に5月27日にとっても長い一般的回答を寄せている*6。この原稿をうけとったマルクスは、マンチェスターのエンゲルスにあてて6月10日に次のようにしるして、ラサルとの論争を一方的にうち切っ

た: „Ein groteskes, nämlich eine Reblik von Lassale an mich und Dich über seinen Sickingen. Ein ganzer Wald von enggeschriebenen Seiten. Unbegreiflich, wie ein Mensch in diesem Jahrzehnt und unter diesen welthistorischen Zuständen nicht nur selbst Zeit findet, solcherlei von sich zu geben, sondern uns sogar die Zeit zumutet, es zu lesen.“^{*7} こうしてラサルが了解できないままにうち切られたいわゆる「ジッキンゲン論争」は、そのドラマよりは手紙によって文学史上重要な位置をしめることとなり、マルクス、エンゲルスの文学論中最も重要なものとして、そのご今日まで、多くの文学研究者に注目されることとなった。一方このドラマは、ラサル死後数回上演されたに止った。若干の個所がラサル派の新聞に抜粋され、またいくつかのシーンが「一般ドイツ労働者協会」の演劇会で上演された。1876年にベルリンのナチオナルテアターでカットした形で上演されたことがある。その時のベルリーナー・フライエ・プレッセの報告では、「観客はそう高い期待をせずに参集したのに、そのわずかな期待すらみたされなかった。^{*8}」しかしそうなのは勝手な、おぎなりの構成によるのであって、この作品の力は第五幕の感動によって裏書きされたのだから、ぜひとも将来完全な演出をしてほしいものだ、と同誌は伝えている。

素材としてのフランツ・フォン・ジッキンゲン（1481—1523）はマキシミリアン一世およびカル五世に仕えた指揮官であって、フッテンと結んで人文主義と宗教改革を促進したが、1522年反乱をおこしたシュワーベン、ライン地方の騎士の先頭に立ってトリエール大僧正を襲撃、失敗して城にたてこもって討死した。彼はラサルのドラマの主人公となっているが、実際はフッテンの方がドラマの創作過程では研究されやすかったのも、より重要な素材となった。すなわちラサルはフッテンの考えを大いにジッキンゲンに適用したのである。ウルリッヒ・フォン・フッテン（1488—1523）はフルダ修道院を11才でとび出して、ドイツ各地で学にはげみ、歴史を前進させた代表的な人文主義者となった。彼は思想と行為を統一させて反動的なカトリックと斗争し、多くの著述や政治詩を通じて情熱的な鋭い言葉でドイツ人の意識に働きかけた。ローマと斗い、ドイツの分裂を克服しようとしたフッテンは、1521年ジッキンゲンと暴動に立ちあがり、敗走して淋しく死去した。その思想が、ルネサンスのブルジョア進歩思想をシュタウヘン王国再興の理想と結合するところに止っており、農民や都市の住民に対する階級的偏見をまぬかれえなかったことは彼の限界を示していた。（ドイツ文学ではC・F・マイアーが彼を「フッテン最期の日々」〔1871〕で叙事詩の主人公にしたが、ここでもまたラサルのジッキンゲンにおけるように農民や市民に重点がおかれなかった。^{*9}）こうしてみると1848年革命の挫折と1863年の労働運動への出発とのあいだにあって、天来の声にうたれたラサルがとりあげた素材は、一定の明確な社会進歩とその限界とをかねそなえたものであって、このような場合、作家が余程精密に素材をしりつく必要があるであろう。すでにエンゲルスは1850年に「ドイツ農民戦争」を出版していたが、ラサルはそれを読み、そのほかとくにダーヴィト・フリードリッヒ・シュトラウスのフッテン伝を重視した^{*10}。この作品の成立史の研究はさしおいて、この論争を理解するために、次にこのドラマのファーベルを要約してみたい。

ジッキンゲンの居城エーベルンブルクで、その娘マリーが父の重臣老バルタザルと話をしている。不正を抑え、新しい、よいことを保護するジッキンゲンの名声と富は、財政上も皇帝から援助を求められるところにまで達している。だからバルタザルは、カル五世が選ばれた時、選帝候たちをとらえてなぜジッキンゲン自ら皇帝にならなかったのかと嘆いている。そこへ現れたジッキンゲンに対して彼は、早く皇帝になり、民衆に役立つことができたろうに、「あなたは寛大すぎるのだ」というが、ジッキンゲンは話をうちきり、ケルンの僧正にロイヒリン迫害をやめるようにと手紙をかける。そこへフッテンが登場する。一同は口をきわめてフッテンをほめドイツ最上の人、権力と斗う人、国民の覚醒者などといい、またマリーはフッテンの筆の力を絶賛している。„Ihr schwingt es für der Menschheit höchste Güter, / Für Freiheit und für Licht, für alles Große. . . / Auf dieser Feder ruht des Landes Hoffnung.“ 第二幕はヴォルムスの城。宰相ハンス・フォン・レナーが、すばらしかった前皇帝の性格にはりあえる人材はジッキンゲンあるのみと独白する。皇帝は二万グルデンを借すのを延期しているジッキンゲンにカル五世は伯爵に昇進させるからとレナーを通じていわせるが、法皇の下に従属するのを恐れてジッキンゲンは応じない。皇帝はトリエール大僧正、プファルツ選帝王、ヘッセン方伯との面会を拒んでまずジッキンゲンと会い、自分の申し出を拒否するのならなぜ自分を帝に推したのか不可解だと問いただす。ジッキンゲンはその理由として、マクシミリアンの孫カル五世がドイツの魂をもっていると思ったこと、強力な皇帝だからドイツの分裂を救うにちがいないと思ったこと、若々しい皇帝だからローマの虚偽を粉碎すると思ったことの三つをあげ、„Sei nicht Rom's Knecht! Werde Kaiser durch die Kraft Martin Luthers!“ と要求するジッキンゲンに対し、カイザーは自分はドイツ人ではないと冷く拒否し、スペインの王として世界帝国を建てるのだという。こうして二人の話が決裂したのち、法王の特使や大僧正はジッキンゲンに反対する諸侯の同盟をつくらうとたくらむ。彼らはルネッサンスと人文主義のすべてを憎む。第三幕になると、皇帝が裏切り、ルターを破門したことをウルリッヒ、続いてジッキンゲンが怒り絶望し、ついに蜂起することを決心するに至る。彼らにとって皇帝と帝国を結んでいた最後のきづなはすでに切れてしまったのだ。„. . . Was wir wollen, / Das ist ein ein'ges, großes, mächt'ges Deutschland, / Zertrümmerung alles Pfaffenregiments, / Vollständiger Bruch mit allem römischen Wesen, / Die reine Lehr' als Deutschlands ein'ge Kirche, . . . “ ジッキンゲンは兵をトリエールに送る決心をするが、そのさいまず兵の半分を送り、他はかき集め保存しようとする。ウルリッヒはマリーと熱烈に愛しあって別れ、マインツ選帝候に援助を求めに出ていく。ジッキンゲンはわずかな兵でトリエールを攻めることを批判されるが、自説をまげず、ついに一同の誓いのうちに幕がとじられる。第四幕でジッキンゲンはトリエールを攻める。皇帝の特使が抑止するが、ますます烈しく彼らは城壁を攻撃する。トリエールの広場では市民がジッキンゲンの勝利を熱望している。選帝候リヒャルトは捕虜の首を切って彼らをおどしてしずめる。しかし攻撃の方はうまくはかどらず、次第にジッキンゲン側の不安がつのってくる。次々悪いしらせが相つぎ、ヘッセン方伯は援軍をとらえ、プファルツ伯は待ちこがれていた弾丸車を攻撃する。こうして勝利の展望は失わ

れ、ジッキンゲンは攻撃をあきらめて逃亡する。

第五幕ではジッキンゲンが占領したラントシュツールの城が猛攻撃をうけている。バルタザルはジッキンゲンが城を明け渡し、暴動的になっている民衆に斗わせる提案をする。ある村の酒場ではヨース・フリッツのひきいる農民たちがジッキンゲンを援ける戦いにたちあがろうとして集まっている。スイスで兵をつのって帰路についたウルリッヒは彼らに出あい、事情を知ってジッキンゲンのもとへ急ぐ。城壁にさえぎられ民家と断ち切られるような方法でなくて、バルタザルのいう通り城の外で彼らとともに斗おうと希望しているジッキンゲンのもとへ、使者に出ていたバルタザルが帰ってきて、城を渡すのみならずジッキンゲン自らをもとらえて渡すほかはないという悪いしらせをもたす。やむをえずジッキンゲンは城の外へと攻撃に転じ、敵をうち破るが自らは頻死の重傷を負う。死に臨んで彼は策略をめぐらし、降伏して自分の身をもさし出すと敵に伝える。裏切った諸侯がやってきて、彼が頻死であるのを知っておどろく。彼は裏切り者たちをのろい、農民蜂起を伝えるフッテンの吉報も時すでにおそいとのべ、マリーと別れをつけ、フッテンに亡命をすすめつつ息絶える。復讐をのちの世紀に託してフッテンは辛うじてのがれる。フッテンは次のようにいいつつこの演劇を閉ぢる。

Der Bauer nur bleibt treu dem großen Zweck:

Er greift zum Schwert—doch auf sich selbst beschränkt,

Schleppt er zur Metzgerbank nur seinen Leib,

Zur blutigen, bedeckt mit seinem gräßlich

Gevierteilten Gebein die weite deutsche Erde. . .

Und lange Nacht bricht an, in schwarzer Schleier

Die Trauerzukunft dieses Landes hüllend.

ラサルの「フランツ・フォン・ジッキンゲン」の以上のようなファーベルは、一貫してラサルが騎士たちの立場を描き、それを中心において賛美し、それに革命的情熱を捧げたことを語るに十分であろう。当然マルクスとエンゲルスからそれに対する批判がうち出された。しかも二人は芸術そのものをよく理解していたので、そこに芸術創造上の重要な問題が提起されたのである。

II 論争の核心

さきにのべたように、ラサルはマルクスに「悲劇的理念についての手稿」と題した、自信に満ちた論文を送っている。ところでこの悲劇的理念が真に悲劇的であるか否かについて、双方の意見が鋭くわかれたのであった。核心となったこの問題は、労働演劇の問題に止まらず、それ以後の歴史劇一般の大問題となった。

革命的な状態に典型的で固有な悲劇の状況は、ラサルによると、革命的理念と指導者の日和見行為の矛盾に本質をもっている。ジッキンゲンは上部層の人々と和解し、つながることで、不幸な指導者に転落していく。ラサルはそれを道徳理念への信頼感の欠如、あるいは道徳の即自的な

無限の力への信頼感の欠如だという：„Die Stärke der Revolution besteht in ihrer Begeisterung, diesem unmittelbaren Zutrauen der Idee in ihre eigene Kraft und Unendlichkeit. . . . Die Begeisterung muß sich somit auf die reale Verwirklichung und in eine Operation mit den endlichen Mitteln einlassen, um in der endlichen Wirklichkeit ihre Zwecke zu erreichen.“ 悪しき有限的手段、有限物への関与を過信することで、理念の無限性という本質的原理を失ってしまうことを、ラサルはまた別の箇所でかしこさによる挫折といっている：Die meisten Revolutionen, die gescheitert sind, . . . sind an dieser Klugheit gescheitert, oder mindestens alle sind gescheitert, die sich auf diese Klugheit gelegt haben.“ このように、くり返して強調されたラサルの革命の悲劇観は、非常に観念的な理念にもとづいている。彼は政治家固有の特性を現実略略、妥協、誤謬、理念の裏切りとなし、革命の悲劇はすべてそこに根源を有するという。これに対してラサルは理念を積極的に賛美しようとしている。エドゥアルト・ベルンシュタインはこれを次のように要約した^{*11}：„Lassalle wollte die Kämpfe, um die es sich in der Geschichte handelt, die tiefen, innersten Gegensätze des allgemeinen Geistes, die in geschichtlichen Wendepunkten ausgesprochen werden, in den Persönlichkeiten des Dramas körperliche Gestalt geben, sozusagen die Ideen, die innersten welthistorischen Gedanken einer solchen Wendepunkte personifizieren.“ 労働運動の設立者ラサルがこのように理想中心主義的になり、道徳中心主義的価値評価を行ったことは奇妙なできごとだといえよう。マルクスはこの主観主義をポーランドの貴族と同じように反動的だとさえいって、そのような考えは表面的に進歩的であるにすぎず、現実においては農民の敵だといった。ラサルはシラーやフィヒテの立場に立って、くりかえしていっている：„Jede wahrhaftige sittliche Schuld ist nur eine intellektuelle, und nur solche Schuld ist eine sittliche, welche eine intellektuelle ist. . . . Dieses Listen ist also auch die Schuld Sickingens. . . . Ein Mangel an unmittelbar sittlicher Gewißheit und Überzeugtheit des Idealen. . . .“ 驚くべき勝利の力は、不可能な、理解しえぬほどのことをしばしば可能にする熱狂者が示すものであり、そのような力をマルチン・ルターが示しているのだ、とラサルは考える。このような悲劇観は、マルクス主義によって主観主義、観念論の謬りとしてしりぞけられる。マルクス主義は支配者と被支配者、指導者と被指導者の全体を包摂する現実そのものから始めるべきであり、あらゆる理念はこの現実の全体から切り離されてはならない。

革命の失敗は指導者の主体にのみ求められてはならない。客観的状況——階級的諸関係が指導者の主体よりもより重要である。マルクスは全く精密に、農民、都市住民、騎士の階級諸関係を分析している。彼は2つの鋭い問いを投げかけ、それに自ら答えている：1. ラッサルが扱っているテーマは観念論的にくみだてられていて、ドラマにふさわしくない。2. 従って彼はわれわれに幻想を信じこませようとしている。まずマルクスはラサルが階級諸関係を正しく学ばなかったことを非難する。ラサルはジッキンゲンの階級的な性格をまず明確にすべきだった。理念や道徳やかしこさのために、ジッキンゲンたちは没落したのではない、進歩的な先駆者としてではなく、没落する階級の代表者として、むしろ支配者の一環として彼らは亡んだのである。こういってマ

ルクスは非常に鋭くジッキンゲンの階級的性格を分析する。そしてマルクスはテーマを自ら書き直す。マルクスの新しいテーマは、明確に階級諸関係の基礎にすえられる。ジッキンゲンは亡びゆく階級の代表者として、諸侯と農民の間に正しくおきなおされる。貴族や騎士についても同じである：Die adligen Repräsentanten der Revolution——hinter deren Stichworten von Einheit und Freiheit immer noch der Traum des alten Kaisertums und des Faustrechts lauert——durften dann nicht so alles Interesse absorbieren, wie sie es bei dir tun, sondern die Vertreter der Bauern (namentlich dieser) und der revolutionären Elemente in den Städten mußten einen ganz bedeutenden aktiven Hintergrund bilden. Du hättest dann auch in viel höherem Grade die modernsten Ideen in ihrer reinsten Form sprechem lassen können, während jetzt in der Tat, außer der religiösen Freiheit, die bürgerliche Einheit die Hauptidee bleibt. ラサルは階級関係を学ばず、その結果、秩序をくつがえす指導者像を美化し、大衆を操縦される人々とみたが、この点でも反動的で独裁的、小市民的でラディカルであった。リフシッツ版の註はこのような考えを、トロツキズムの先駆であるとなし、さらにボナパルティズム、シーザー主義に近いと非難した*12。ルカチはこれを抽象的・図式的、観念的・非歴史的な日和見主義とのべ、初期の革命への展望を遮るものと非難している*13。レーニンもまた、この論争を例にとりて、メンシェヴィッキに忠告を發し、彼らが労働者・農民よりも左翼ブルジョアを重視するのを非難している*14。

エンゲルスによれば、騎士たちの法皇や王候に対する憎悪やドイツ統一の目標はしばしば誤解され、英雄的な行為だとみられるが、彼らは実際はドイツブルジョアジーの英雄たちであった。資本主義が始った社会における彼らの運動は、本質的には反動的といえよう。ジッキンゲンとフッテンは中世国家の復活を夢見、権力を諸侯のなかに収め、皇帝を操ろうとしていたにすぎない。彼らは農民や都市市民の援助を求めたが、彼らを解放することはその目的ではなかった。従ってジッキンゲンはドン・キホーテであり、亡びゆく階級の代表者である。この亡びゆくものではなく、余りにも早く舞台に現れたトーマス・ミュンツァーを典型化することの方がはるかに重要だった。マルクスは、ルター的・騎士的反対派の方を平民的・ミュンツァー的なものの上においたジッキンゲンの誤りを指適してこういっている：„Bist Du nicht selbst gewissermaßen wie Dein Franz v. Sickingen in den diplomatischen Fehler gefallen, die lutherisch-ritterliche Opposition über die plebejisch-Münzerische (vom Volke ausgehende) zu stellen?“ 同様のことをエンゲルスも指適する。ラサルは官庁的でない、平民的で農民的なエレメントを十分に評価しなかったが、これらのエレメントは騎士や貴族のそれらよりも軽いといえるものではない。それにもかかわらずラサルはこれらのエレメントを余りに弱くしかとりあげなかった。平民的要素を関連づけてこそこの作品は正しい光にすえられたであろうに。そうしないから、ジッキンゲンの運命の真の悲劇的エレメントは失われたのだ、とエンゲルスはいう。2人の考えによると、農民とジッキンゲンの同盟が不能だったことこそが、まさにジッキンゲンの悲劇だったのである。エンゲルスによれば、農民の支持をひろげたあのミュンツァーの考えはカ

トリックのみならずキリスト教一般のかなめを攻撃しており、彼の神の国とは階級関係や私有財や外国の権力のもはやない地上の国にはかならなかった*15。このことを考えても、農民たちが騎士たちに同盟を求めるはずはなかった。だからエンゲルスはいつている：„Die Durchsetzung der nationalen Adelsrevolution war aber nur möglich durch eine Allianz mit Städten und Bauern, besonders den letzteren；und darin liegt meiner Ansicht nach grade das tragische Moment, wo er an die Spitze der nationalen Bewegung treten wollte, die Masse der Nation, die Bauern, gegen seine Leitung protestierten und er so notwendig fallen mußte.“ 歴史的な必然ともいふべき貴族の保守性と、実際に不可能となっていた農民と騎士の同盟のあいだに生じる悲劇的な葛藤を見失ったラサルは、悲劇のより劣ったディメンションしか獲得できなかった。しかも最後までラサルはジッキンゲンをこういつて弁護した：„Sickingen geht daran unter. . , daß er nicht mit einem Satze mitten ins Herz der revolutionären Situation gesprungen, daß er nicht, alle Schiffe und Brücken verbrennend, an die unterste und äußerste revolutionäre Schicht appelliert und so alle revolutionären Kräfte der Nation offen entfesselt habe. . .“

ラサルの最後の手紙になると、彼の農民戦争観がどのように歪んでいるかがいよいよ明確になってくる。ラサルはくり返して、農民戦争における農民が革命的でなかったとのべ、最高度に一ジッキンゲンや貴族と同じていどに反動的だったのだという。彼らがなぜ反動的だったかといえ、彼らが自然ではなく (nicht von der Natur sein)、また十分にラディカルでなかったからだ、という。ラサルは搾取という経済上の問題を考慮外において、搾取をなくすのにどうするかを考えようとしな。彼の反動と革命の概念は硬直して非弁証法的であるといえよう。階級対立抜きで、ラサルはいつ：„Diese unreaktionäre Idee ist es, welche der historische Sickingen, die historische Adelspartei und die Bauernbewegung gleichmäßig zu ihrem Fundamente haben, und an der sie alle drei den gemeinsamen historischberechtigten und notwendigen Grund ihres Untergangs haben.“ ラサルは農民戦争がエゴイズムのせいでひどい結末を招いたのだといふ：„Aber die äußere Ursache des schlechten Ausgangs der Bauernkriege war die totale Gleichgültigkeit, die jeder Haufen gegen den Anderen hatte, ein Egoismus, eine Partikularisation, eine Borniertheit ohnegleichen,“ 農民たちはラサルによれば、古い土地所有にすがりついていたから、このシステムを保持しようとした反動である。しかしエンゲルスの研究をみても、諸外国の例を見ても変革期の変革者は地上の天国を実現しようとした民衆であった。農民達の挫折は歴史の歯車を逆転しようとしたからではなく、フランツ・メーリングが説くように、前進する条件が未だ成熟していなかったのに、車を前に廻転させようとしたからにはかならない*16。奇妙にもラサルは歴史的に反動的な主人公を、革命的行動力でみちたドラマの主人公に仕立て、自ら反動的とみなす農民をできるだけ革命的なものに仕立てあげる。

„Es zeigt sich jetzt, daß während überall Planen, Schwanken und Halbheit war, hier allein Handlung und Kraft war. Ganz auf sich selbst gestellt, ganz getrennt von allen offiziellen

Bewegungselementen, aus sich allein und in sich allein arbeitend, steht der Bauernaufstand gerüstet da, alle Momente zum Losschlagen fertig und bereit.“ ラサルは歴史上の農民でなく、革命的農民を書き、また明確な目的を持ちながら手段不足のために、農民をあざむいて迎えようとするジッキンゲンを書いた。メーリングの要約によれば、ラサルはジッキンゲンの革命的目的を反動的手段で貫こうとしたが、実際はそうならず、彼の作品は反動的目的を革命的手段で貫こうとしたものようになった。たとえジッキンゲンが全国民をたちあがらせることに成功したところで、ジッキンゲンは前進することができず、農民たちとの大きな矛盾をひきおこすことになったであろう。歴史と現実を正しく見ることできぬ者は、結局のところますますその欠陥をさらけ出さざるをえず、リアルな、アクチュアルなものがかけないのみか、芸術自体としてみても無力なものを作り出す結果になるのである。

1859年にラサルはエンゲルスが「農民戦争」の序でかいたのと同じ視点から、„meinen Streit mit meinen hiesigen Bekannten über die politischen Zustände und unser Verhalten zu denselben im allgemeinen mitzubeleuchten“ と書き送っている。この点で「ジッキンゲン」は非常にアクチュアルな視点をもって書かれた、いわばプロレタリア演劇の最初の試みであり、労働演劇の始まりなのであった。この作品をめぐるマルクスとエンゲルスの批判は以上のように歴史・政治的問題を核心となすものであるが、それは当然のことであるともいえよう。しかし、そのようなマルクス主義の党派性だけがこの論争の焦点なのではない。マルクスとエンゲルスがバルザックやハイネやゲーテをしるした言葉は驚くばかり柔軟な、芸術自体と社会全体の弁証法を示している。ただバルザックを論じてエンゲルスが政治的党派性なしにリアリズムを獲得できた小説家に注目したとすれば^{*17}、ここでは政治的党派性がありながら正しいリアリズムを獲得できなかった演劇作者を扱ったのである。この双方のケースは相補う理論にと構成しうるだろう。ジッキンゲン論争では党派性をもって書かれた以上その党派性が正確でなくてはならぬことが主張されたのである。この場合党派性と史的唯物論に徹してこそリアリズムに到達しうるのであるが、それは逆にリアリズムに徹してこそ党派性が結果として生じているバルザックの場合と、よい対照をなす好例なのである。党派性にみちたラサルが、48年革命でブルジョアの限界を示した者たちと同じはずのジッキンゲンを理想化し、プロレタリアの階級利害を裏切り、あるいはラサルが小ブルジョア急進主義的に革命の幻想をふりまき、労働者階級を危険にさらすようなことになるとすれば、粘り強い党派性でもって、亡命の地からベルリンのラサルに親しく呼びかけて、ぜひともこれを正していく必要があったのである。ラサルがベルリンで大きな影響力を持とうとしていただけに、そのことはマルクスとエンゲルスにとって責任の重い課題であったにちがいない。しかもこの論争は芸術創造上のいくつかの大問題をさらに投げかけている。

Ⅲ 歴史劇創造上の諸問題

ラサルは、もしジッキンゲンが諸侯に反抗して皇帝と公然と斗ったなら勝ったであろうにという幻想を与えようとした。このことを指適したマルクスは、「われわれはこのような幻想にくみ

しえない」とのべている。不可能事を信ずることはできない、これは誤った幻惑だとすマルクスに対しラサルはいう： „Wenn Balthasar, dieser in den Mittelpunkt der ganzen Situation gestellte und sie so gewaltig umfassende Kopf, sich dieser Illusion hingeben kann, . . . so ist damit eben genug bewiesen. Denn im Drama behandelt es sich nicht um kritisch-philosophische Wahrheit, sondernum ästhetische Täuschung und Wahrscheinlichkeit.“ ラサルはこの幻惑は全く可能であり、問題は美的幻惑だということである。しかし美的幻惑や仮象がそういうものとして作家に意識されているか、それともそれに読者をおとしこみ、それに感情移入を強い、その夢を見させるかは、大きな違いであるといわねばならない。バルタザルがこの幻想に没頭し、それをラサルがさらに高め、観客がさらにそれをわかつということ、われわれが幻想を解いてしまえないこと——それがリヤリズムのなものを失った審美主義だといえるだろう。「典型的状況下の典型的性格」を作品に付与できないラサルは、リヤリズムを歪曲して、リヤリズムが持つ幻想や夢の機能を全く保守的なものと化している。リヤリズムの美的仮象の機能は、アドルノの言葉を待たずとも、否定的弁証法でなくてはならない。同様のことが2人のあいだで『ゲッツ・フォン・ベルリヒンゲン』にかんしても論じられた。騎士と皇帝ないし諸侯の関係は、ゲーテにおいては適切な形で現れたが、ラサルにおいては不適切 (unadäquat) な形で現れているとマルクスはいう。ゲーテは錯覚なしにこの関係をとらえたが、ラサルは歴史的・現実的に歪めて、恣意的に扱っている。この批判に対し、ラサルはいつている： „ . . . und ich habe es mir immer nur aus dem Mangel an historischer Anlage in dem Geist Goethes zu erklären vermocht, wie er diesen durchaus rückwärtsgewandten Burschen zum Helden einer Tragödie machen konnte. Dein Lob dabei kann ich nicht gelten lassen, denn Goethe will ja das positive Interesse auf ihn fixieren.“ こうしてラサルはゲーテがどんなに正しく、現実の諸関係をとらえて、芸術と政治の統一を達成したかに注意を払うことができず、一方交通的に革命化されたか否かでゲーテを見降ろしている。

それゆえにマルクスとエンゲルスはラサルの芸術創造に、シラー化 (Schillern) という批判を投げかけた。シェイクスピア化という言葉と対をなして使われているこの言葉は、現想化し、空虚になり、ふくれあがった形象をつくり、芸術と政治の統一が達成されないラサルの欠陥を解明する。これに対してラサルは、こう答えた： „Möchtest Du auch ganz und gar recht haben gegen den historischen Sickingen, so hast Du doch nicht recht gegen meinen Sickingen. Und hat der Dichter nicht das Recht, seinen Helden zu idealisieren, ihm ein höheres Bewußtsein zu leihen? Ist der Schillersche Wallenstein der historische? Der Homerische Achill der wirkliche?“ しかしマルクスやエンゲルスが指適したことは、歴史上の主人公と作品上の主人公の一致ということではなく、現実諸関係の正しい把握ということであり、シラー化せぬことという要求は、ハンドルングの生彩と充実、深い思想と意識的歴史内容——この双方を一つにとかしこんで芸術となすことをうながすことであった： „ . . . und die volle Verschmelzung der größeren Gedankentiefe, des bewußten historischen Inhalts, die sie nicht mit Unrecht dem deutschen

Drama zuschreiben, mit der Shakespeareschen Lebendigkeit und Fülle der Handlung, wird wohl erst in der Zukunft, vielleicht nicht einmal durch die Deutschen erreicht werden. Darin sehe ich allerdings die Zukunft des Dramas.“ さらにまたエンゲルスは、ドラマのモチーフ、ハンドリング、言葉について、鋭い注意をうながし、とくにせりふの論争ぐせが余分なものであるとのべ、また主人公の性格についても、次のように注意している： „Wenn einzelne Charaktere etwas schärfer von einander in mehr gegensätzlicher Weise geschieden worden wären!“ マルクスもまた性格について次のようにのべた： „Und gab es eine Zeit von mehr derber Charakteristik als die des 16. Jahrhunderts? Hutten ist mir viel zu sehr bloßer Repräsentant von „Begeisterung“, was langweilig ist. War er nicht zugleich geistreich, ein Witzteufel, und ist ihm also nicht großes Unrecht geschehen?“ マルクスとエンゲルスが芸術創造上の諸問題にこのように鋭くきりこんでいることは、マルクス主義芸術理論に大きな示唆を与えるものだといえる。マルクスによると、シラー化するとは「個人を単なる時代精神の伝声管となすこと」であった。二人は個々の詩句についてそれを指適し、ヤンプスのまずさに至るまでふれている。

ペーター・ウェーバーの研究によると、ペーター・デーメッツは、この論争が美学上の価値に欠けているとみなした^{*18}。デーメッツは逆にラサルが、芸術と歴史、美学と政治のあいだの根本的な矛盾をよく知って、美しい仮象、美的幻想の方法を用いることを正しく主張したのだという^{*19}。ラサルが古典美学にかなうものとなすデーメッツのような考えは、マルクスとエンゲルスを逆に評価し、2人が社会的要求を芸術作品にもちこみ、表面的に芸術と政治の結合をはかっているとなした。しかしエンゲルスが、よく読むならば、マルクスと同じくむしろ芸術の自律性を強調していることは極めて明確である： „Indes scheint mir, daß eine Person nicht bloß dadurch charakterisiert wird, was, sondern wie sie es tut. . . Die Charakteristik der Alten reicht heutzutage nicht mehr aus, und hier, meine ich, hätten Sie der Bedeutung Shakespeares für die Entwicklungsgeschichte des Dramas wohl unbeschadet ein wenig mehr Rechnung tragen können.“ このような芸術自体に深くかわる二人の理論は、デーメッツの考えとは反対に、マルクスとエンゲルスの理論が、美学的にも極めて高度なものを要求していて、決して俗流化した社会学的図式主義に流れていないことを証明しているといえよう。それは思想の深みと歴史的内容を伴った芸術創造自体であり、註釈学や経験的文学社会学や伝統的美学を批判的に包摂したものとしての、最も豊かな史的唯物論の美学である。

文学は歴史や政治と切り離せず、歴史や政治は文学の基盤である。この双方の統一がマルクス主義芸術理論のかなめをなしている。マルクスとエンゲルスが歴史をしばしば革命のドラマとして語っているのは注目し値する。エンゲルスはヴィルヘルム・ヨルダンの世界史的立場について語り、ポーゼン地方がプロイセンに帰属すべきだとのべてこれを大ポーランド劇の一エピソードとなしたヨルダンを非難した^{*20}。これは歴史における悲劇的なものの観念的な把握にすぎない。ヨルダンは侵略的な歴史の歯車に手をつっこむなど危険なことだと考え、つつましく「主よみこころのままに」といい、それが真の悲劇だと宣言する。彼は歴史的諸環境に全く無知であ

って、彼の全世界史的立場はその無智の上に建てられている。マルクスはラサルをこのようなポーランドの貴族ににていると考えた。彼はこのような観念的で反動的な歴史観に、自らの史的唯物論を対置し、革命の歴史を力強く唱えている*21。「ヘーゲルはどこかであらゆる偉大な歴史的事実や人物は二度現れる、といった。しかし彼はこうつけ加えるのを忘れたのだ、一回目は悲劇として、二回目は笑劇として。」しかしマルクスによると、このような歴史の演劇は19世紀に様相を一変させた。もはやわれわれはポエジーを過去から汲むべきではなくて、未来からくみとるべきときなのである： „Die sozialistische Revolution des 19. Jahrhunderts kann ihre Poesie nicht aus der Vergangenheit schöpfen, sondern nun aus der Zukunft. Sie kann nicht mit sich selbst beginnen, bevor sie allen Aberglauben an die Vergangenheit abgestreift hat. Die früheren Revolutionen bedurften der weltgeschichtlichen Rückerinnerungen, um sich über ihren eigenen Inhalt zu betäuben. Die Revolution des 19. Jahrhunderts muß die Toten ihre Toten begraben lassen, um bei ihrem eigenen Inhalt anzukommen. Dort ging die Phrase über den Inhalt, hier geht der Inhalt über die Phrase hinaus.“ このような意味深い言葉に照らしてみると、ラサルにおいては明確な未来が読みとられえないことがわかる。それは過去についての誤った考えや、内容についての美化がラサルにみられるからである。さらにここで、「ヘーゲル法哲学批判」のなかの有名なマルクスの言葉が思い出される*22。われわれは科学的マルクス主義の時代に生き、まず変革せんがために国民の過去をわれわれのものとしねばならない。だが過去の反復としての現代は喜劇のように思われると、マルクスはいう。解放の思いが未だ個々人の思いつきにすぎなかった昔は、個々人の悲劇がみられたが、今日の政府はアナクロニズムにすぎず、旧政体のつまらなさは目の前に喜劇の姿をさらしている。われわれは過去からたのしく別れをつげうる。われわれはこういう別れの権利を持っている： „Diese heitere geschichtliche Bestimmung vindizieren wir den politischen Mächten Deutschlands.“ ラサルがどのような過去からの別れを欲したかについてはすでに見た通りである。それは heiter な別れではなく、誤った感情移入に基いている。48年革命にブルジョア政党がやったのと同じことをやったジッキンゲンとフッテンに希望を託したラサルは、もはや過去から別れをつげる人ではなく、過去にすがりつく人に属してしまう。まさにペーター・ヴェーバーがいうように、マルクスとエンゲルスには、友情的に、党派性の立場から、史的唯物論と階級斗争のために、ラサルに忠告し、その危険な道を阻止する課題が生じたのであった。ラサルのイデーは宗教的でブルジョア的でさえある。しかしこの忠告は成功しなかった。1868年にマルクスはいつている： Er fiel in den Fehler Proudhons, die reele Basis seiner Agitation nicht aus den wirklichen Elementen der Klassenbewegung zu suchen, sondern letzterer nach einem gewissen doktrinären Rezept ihren Verlauf vorschreiben zu wollen.“ このような問題はエンゲルスの『ドイツ農民戦争』の序文と、ラサルの『ジッキンゲン』序文とを比べると、すでに明白にあらわれている。

歴史における歴史劇を正しく読みとることができなかったラサルは、歴史の革命的な動きを歪曲

し、実際の階級関係を失って、ジッキンゲンはただ自分の自由のために農民と同盟を結ぶかのようになってしまった。エドゥアルト・ベルンシュタインはいつている：「騎士たちは今日のリベラリストのように自由をおおげさに要求している。しかしその当時人間のこと、自由、キリスト教徒のことはなんだったというのか。」„Diese und eine ganze Reihe ähnlicher Verstöße gegen die Geschichtlichkeit sind um so auffallender bei Lassale.“ ドイツ人たちはこのような詩句を読んで、全国民のこととして感じるはずはない。今日の労働者にとってラサルの騎士たちの理念は空虚で観念的なのだ、とベルンシュタインはいつた。このようになったのは、ラサルが歴史における歴史劇を学びえなかったからである。

ラサルは階級発展の具体的・歴史的弁証法、革命の現実の弁証法を学ぶことができず、その思考法はヘーゲルよりも保守的な二元論で、フィヒラ、シラー、カントにより近いものである、とルカーチはいつ。ここにおいては必然と自由、現実と理念、歴史と現実などが非弁証法的な二元論の上に、はなれて立っている。ラサルが誰よりもさきに、また熱心に革命劇を書こうしたのに、その党派性にもかかわらず作品が意図にはるかに及ばなかったのは、ファーベルにおける一般と特殊、個人と階級などの弁証法が欠けていたからだった。彼には歴史における歴史劇と、歴史劇における歴史性が統一されなかったのである。ジッキンゲン論争は文学・芸術におけるマルクス主義的弁証法をこのように明確にさし示すゆえに、文学史的に重要な論争なのであった。プロレタリア階級の重要なドラマはすでにビューヒナーにみられたが、まだまだ本格的なものは少なかった。今日ブレヒトに至るプロレタリア演劇の発展を見渡すならば、この論争が占める重要な位置はおのずから明らかである。ブレヒトの『ガリレイの生涯』や『コミューンの日々』において、マルクスやエンゲルスがドイツ文学の遠い将来に託した夢、すなわち意識された深い歴史的内容と生き生きしたハンドルングの充実の統一融合が達成されたのである。

ルカーチのほか、とくにペーター・ヴェーバーの研究は、美学上の問題を系統的に研究してその歴史のなかにこの論争をしっかりと位置づけようとしているのであるが、このような研究はマルクス主義美学に対する偏見をとりのぞく点で、たいへん有意義である。ヴェーバーはW・ベンヤミンの研究成果にもある通り、17世紀の悲劇が公共の、至高のものによって代表される事件を扱い、歴史・社会的に規定されているコンフリクトを目にとめなかったのだという。偉大な者の運命は即ち悲劇なのであり、社会的観点を度外視した、いわば人間の虚栄をとり出して示すできごとなのであった。ゴットシェットの文学観は王侯の理念——貴族に教育的にかかわる芸術にもとづき、従ってドラマは道徳的な性格から評価されざるを得なかった。しかるに、同じく教育的であるが、レッシングの『エミリア・ガロッティ』は対立する社会勢力を把握し、また宮廷との結合はきっぱりした批判的対立を含むものとなった。ゲーテはさらに一歩進めて、客観的で歴史的な芸術観を獲得している。さらに一歩進めて、1771年にゲーテはこう書いた：„Shakespeares Theater ist ein schöner Raritäten-Kasten, in dem die Geschichte der Welt vor unsern Augen an dem unsichtbaren Faden der Zeit vorbeiwallt. Seine Plane sind. . . keine Plane, aber seine Stücke drehen sich alle um den geheimen Punkt (den noch kein Philosoph gesehen und

bestimmt hat), in dem das Eigentümliche unsres Ichs, die prätendierte Freiheit unsres Willens, mit dem notwendigen Gang des Ganzen zusammenstößt.“ ゲーテは個人と社会の葛藤の合法性をよく理解して、彼以前の悲劇観を立派に克服できた。英・仏の革命を経験し、ヨーロッパ文学を広く識り、汎神論を始め新しい思想を身につけたゲーテの美学は、この点では社会主義理論の設立者たちの考えにつながるものであった。しかしヘーゲルに続いて、観念的・理想主義的悲劇観をもったラサルは、マルクスやエンゲルスと矛盾せざるをえなかった。ヴェルテルやウルファウストの詩人は、ラサルよりもはるかに封建主義の根っ子をつかんでいる。1827年3月28日にゲーテはエッケルマンにヘーゲルの悲劇観についての不満をもらし、分極した個人と国家の硬直した、道徳化された弁証法を批判した。ヴェーバーはルカチがゲーテとヘーゲルをともに革命的・弁証法的となすのに強く反対し、ヘーゲルが既存の秩序の肯定に終る弱点をとり出す。19世紀のなかごろの美学はF. Th. フィッシャーとヘッベルに頂点をきづいているが、この二人の考えはヘーゲルの弱点部と結びついて発展してきた。フィッシャーによると悲劇の真の本質は、絶体的なものと主観的なものになる。この主観的なものは絶体的な者に、より高き者にその存在を負っている。このようなフィッシャーの美学は48年革命に挫折した者の、すなわちドイツブルジョアジーの美学であった。それはプロレタリアと封建勢力とにはさまれた不安な階級の美学であった。この悲観主義と非歴史性はさらにヘッベルの演劇で高められる。歴史的に無方向な、主観主義的性格がヘーゲル、フィッシャー、ヘッベルを通じてラサルに伝えられたのである。ヘッベルはいつている: „Die dramatische Kunst soll den welthistorischen Prozeß, der in unseren Tagen vor sich geht, und der die vorhandenen Institutionen des menschlichen Geschlechts, die politischen, religiösen und sittlichen, nicht umstürzen, sondern tiefer begründen, sie also vor dem Umsturz sichern will, beendigen helfen.“

19世紀中葉のこのような、R. ワグナーに至るドラマの歴史のなかで、ラサルが主観主義的で歴史方向のさだかでない演劇を書いたのは、このような研究によってみるに、そう不思議なことではなかったのである。ただマルクスとエンゲルスがそれをかくも明確に徹底して批判できたことに、いまさらのように新しい科学の力を感じざるを得ない。最後に再び、歴史劇とは何かを中心に、「ジッキンゲン論争」を総括してみようと思う。

1. ラサルの誤った悲劇観は主観的な観念論に基いていた。ソフォクレスの「アンティゴネー」にみられる発展変化する社会勢力、原始社会からのポリスの生成のような歴史変革の試みと偉大なドラマの開花は、ルカチが指適するように一つなのである^{*23}。社会と個人、社会変革の危機と主人公の劇的内容は密接に関連していなくてはならない。しかるに「ジッキンゲン」においては非弁証法的な道徳主義が支配する。

2. さらに、ラサルの描く階級関係はアクチュアルな、現歴史時点で生きる史劇の根源的な力を喪失している。真の史劇は階級的・平民的でなくてはならない。一主人公の葛藤は圧迫された側の代表者として、あるいはその正確な反映者として力を発揮することをラサルは忘れていた。

3. ラサルはこうして歴史の全体を把握できないで、社会発展の一段階を歪めてあらわす結果

となった。主人公の世界観や人生観の全体と国民精神の客観とは分裂したものとなり、一つになることができなくなったのである。

4. 当然ラサルの歴史性は昔の遠方のものを生き生きと身近にもたらしはしない。目の前に動くドラマの事件が現在的に体験され、過去の学習が今日の学習となるためには、過去の持つ典型性が未来からの光によって照らし出されなくてはならない。

5. ラサルのシラー化は、そのような未来の光がないままに、主人公を抽象化し、時代の伝声管と化し、生彩を失わしめる結果となった。形式はそれ自身として生み出されるのではない。危機について語る表現の真実が、シェイクスピアの生彩に匹敵する生きた形式を獲得するのである。

文 献

1. Franz von Sickingen. Eine historische Tragödie von Ferdinand Lassalle. Berlin 1859
2. Ferdinand Lassalle an Marx in London ; Berlin, 6. März 1859 In : Karl Marx, Friedrich Engels, Über Kunst und Literatur. Erster Band. Berlin 1967 S. 166—170.
3. Ferdinand Lassalle : Aufsatz über die tragische Idee. Ibid S. 171—178
4. Marx an Ferdinand Lassalle in Berlin ; London, 19. April 1859. Ibid S. 179—182
5. Engels an Ferdinand Lassalle in Berlin, Manchester 18. Mai 1859. Ibid S. 182—187
6. Lassalle an Marx und Engels in London ; Berlin, 27. Mai 1859. Ibid S. 188—217
7. Marx an Engels in Manchester ; London, 10. Juni 1859. Ibid S. 217
8. Die Sickingen Debatte. In : Frühes Deutsches Arbeitertheater 1847—1918. Eine Dokumentation von Friedrich Knills und Ursula Münchow. München 1970. S. 62—92.
9. Conrad Ferdinand Meyer : Huttens letzte Tage. 例えば Der letzte Humpen の章はこうしめくくっている :
Den ersten Trunk dem Heil'gen Röm'schen Reich!
Möcht' es ein weltlich deutsches sein zugleich!
Den zweiten meinem Kaiser! Möcht' er sein,
Der fünfte Karl, so echt, wie dieser Wein!
Den dritten bring' ich jedem auf der Welt,
Der sich und seinen Becher wacker hält!
10. Vorwort zu „Franz von Sickingen.“ Ibid
11. Eduard Bernstein. Vorbemerkung zu „Franz von Sickingen. Ibid.
12. Karl Marx, Friedrich Engels : Über Kunst und Literatur. Eine Sammlung aus ihren Schriften. Herausgegeben von Michael Lifschitz. Mit einem Vorwort von Fritz Erpenbeck. Berlin 1948.
13. Georg Lukács : Die Sickingendebatte zwischen Marx-Engels und Lassalle. 1931 (In : Probleme der Ästhetik. Berlin, 1969.)
14. レーニン : 選挙カンパニアの原則的諸問題 (レーニン : 文化・文学・芸術論 下巻 995頁 1969. 大月書店刊)
15. Friedrich Engels : Der deutsche Bauernkrieg (In : Marx-Engels Werke 7. Berlin 1960.) とくに Kapitel II. Die großen oppositionellen Gruppierungen und ihre Ideologien—Luther und Münzer.
16. Franz Mehring : Lassalles Trauerspiel. In : Geschichte der deutschen Sozialdemokratie. Erster Teil. Berlin 1960
17. Engels an Margaret Harkness in London, Anfang April 1888 (In : Karl Marx, Friedrich Engels, Über Kunst und Literatur. Bd 1. S. 157—159)

18. Peter Weber : Die Einheit von politischer und ästhetischer Kritik in Marx und Engels' Stellungnahme zu Lassalles Drama „Franz von Sickingen.“ Weimarer Beiträge Heft 516 1966 Berlin.
19. Peter Demetz : Marx, Engels und die Dichter. Stuttgart 1959
20. Die idealistische Auffassung vom Tragischen. Aus : Engels, Die Polendebatte in Frankfurt. (In : Marx, Engels, Über Kunst und Literatur. Herausgegeben von Michael Lifschitz. Ibid)
21. Aus : Marx, Der achtzehnte Brumaire des Louis Bonaparte. In : Marx-Engels, Über Kunst und Literatur. Erster Band. Berlin 1967. S. 160—163
22. Aus : Marx, Zur Kritik der Hegelschen Rechtsphilosophie. Einleitung. In : Marx-Engels. Ibid. S. 159—160
23. Georg Lukács : Der historische Roman. Zweites Kapitel, Historischer Roman und historisches Drama. (In : Probleme des Realismus III, Berlin 1965.)